

# 酒々井町郷土研究会々報

第 10 号  
昭和 54. 2. 28  
発行 郷土研究会  
酒々井町郷土研究会総務部

## 郷土研究会の

発展に想おう

教育長 福田正吉



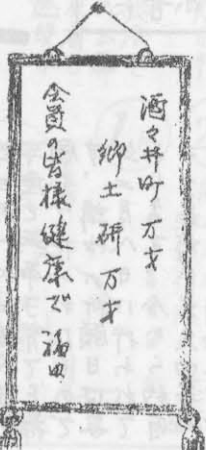
政治経済等非常に  
きびしい中に、昭和五  
十四年の暦が開かれま  
した。世情とは裏腹に  
近年にないすばらしい  
天候に恵まれた幸先の  
よい年頭でありました。  
加えて、七日には良き時代の  
郷土(ふるさと)を思わせる  
七草かゆと食べる会が、自  
然の内に(会所方の皆さまも苦  
勞さまでした)多数の参加者  
を得て催されたことは、誠に  
意義深く、又ほんとうに喜ば  
しく思いました。

郷土研究会も創立以来はや  
三回目の総会を重ねるに至り  
ました。当初私どもの予想し  
た会員数をはるかに上まわる  
参加者を得、事業内容も細か  
く深くなり、研究領域にまで  
発展してきました。同じ目的  
と趣味をもった方々であるだ

けにすばらしい会であり、生  
甲斐と与える会であると思  
います。旧時代の歴史を究明し  
文化を知り、生活の知恵を学  
び、天地和合の強大さに驚き  
時の流れを計った時、今我等  
何を為すべきか、そんな思い  
も出てこようというものです。

会報は特に楽しみに読んで  
います。すでに今回第十号が  
発行され、内容も会員の皆さ  
まの寄稿により幅広く見聞記  
体験記・研究発表等、俳句  
短歌にこころよい安らぎと覚  
えさせます。さらには編集部の素  
人っぽい面も生きて血の通っ  
た会報が出版されていること  
に敬意を表します。

会報は、いわば会員相互理  
解のための潤滑油でもありま  
す。今後本会の和が更に広が  
り、本研究会がなお一層発展  
することを期待しております。



(七草かゆの折雑文ノートより抜き書き)

七草なづな唐土の鳥か  
日本の空へ渡らぬ先に  
なづな七草そろえて  
トーン・トーン・トーン

この歌は京増忠太郎が幼頃より  
愛したといふもので、昔は早稲の  
ころ風邪など流行るの、海を越  
えた所より鳥が運んでくるものと  
考えられてきた。なづな、春若菜を  
摘み分けて食すという風習は榮  
華落きに  
考えてみて  
グリン・グ  
を取ること  
風邪の予防  
ひいては万病  
の予防と  
も理にか  
た健康法で  
あったら  
考え直さ  
七草の  
お祝いす  
春あかり  
京増次郎

### 新春七日 七草かゆを 食べる会



研修所にて 28名参加  
雑文ノートを用意したところ  
色々書き込んでいただきましたので  
ご紹介しましょう。

言う勿れ今日暮らずして  
明日ありと  
言ひ勿れ今年暮らばすして  
来年ありと  
日月ゆきぬ  
年われを待たず  
あゝ老たり、れ誰れの  
過ちや、木内忠治郎

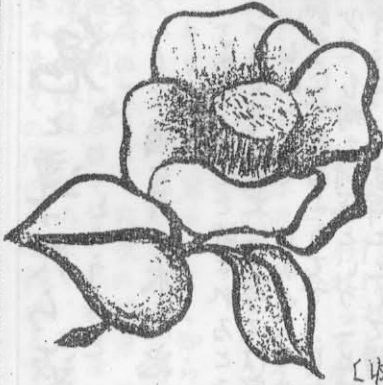
健康 談笑の会か  
欲しくて  
七草かゆ  
すする集いに  
皆楽し 芥末

七草のかゆで七年  
長生ます 小別当  
七草のかゆで七年長生ます  
生きてよ、やら悪いやら  
生きてよ、やら悪いやら  
又逢える  
次は山菜摘みの会  
同じ類  
年改まり集う今日  
古川今子  
雲白し 山青く  
流水石にたつ  
京増忠太郎  
呑亦もなく  
年取られて昼寝かな  
青丘  
つとつとに  
幼き頃の想ひ出の  
話はずいず  
七草の宴  
無名氏

### 食

七草のどい  
かな  
自然に  
生きる  
もこと喰う会を増やせ  
土用：鰻を喰う会  
冬至：南瓜を喰う会  
e s c

吹き淫め吹き淫め  
七日粥 (松尾)  
七草を別に供へて  
かゆの会  
七日草の歌習へつ  
かゆの会



# 昭和 54 年度 第三回郷土研定期總會報告

(議事)

(昭和 54 年 1 月 27 日)  
酒々井町青年研修所

(1) 昭和 53 年度 (收支決算書)

[支出の部]

科目	予算額	決算額	増減
会議費	40,000	39,350	670
事務費	20,000	19,900	100
通信費	40,000	32,050	7,950
消耗品費	20,000	14,040	5,960
事業費	100,000	99,795	205
負担金	5,000	2,000	3,000
予備費	94,306	0	94,306
計	319,306	207,115	112,191

[収入の部]

科目	予算額	決算額	増減
会費	140,000	155,000	15,000
補助金	50,000	50,000	0
寄付金	10,000	6,000	△4,000
繰越金	118,306	118,306	0
雑収入	1,000	2,176	1,176
計	319,306	331,482	12,176

[収入総額]

[支出総額]

331,482 円 - 207,115 =

124,367 [次年度繰越金]

(2) 昭和 54 年度 (予算書)

[支出の部]

[収入の部]

科目	前年度予算額	本年度予算額	増減
会費	140,000	155,000	15,000
補助金	50,000	50,000	0
寄付金	10,000	10,000	0
繰越金	118,306	124,367	6,061
雑収入	1,000	2,000	1,000
計	319,306	341,367	22,061

科目	前年度予算額	本年度予算額	増減
会議費	40,000	50,000	10,000
事務費	20,000	30,000	10,000
通信費	40,000	40,000	0
消耗品費	20,000	20,000	0
事業費	100,000	150,000	50,000
負担金	5,000	10,000	5,000
予備費	94,306	41,367	△52,939
計	319,306	341,367	22,061

(3) 事業報告(53年)と事業計画(54年)

事業名	昭和 53 年度事業報告	昭和 54 年度事業計画
古文書学習会	○ 5月13日に開設し 5、6月は毎月1回、7月以降は毎月2回実施。出席者の顔ぶれはほぼ定着	年間 10 回と予定
郷土史講座	○ 7月～9月の間 6回の実施。主として近世江戸時代の政治、産業、文化、信仰、藩制等についての講義	年間 6 回、教育委と共催座談会など折りにこめて
野草の会	○ 1月の七草かゆ、4月の山菜を食べる会と内容もゆたかに9月を除く毎月実施	年間 10 回 楽しむ会らしい
石仏調査	○ 7月～9月に、上本、本佐倉、柏木、下岩橋、馬橋、尾上墨の地域を実施。雨にたたられながら……	53年～55年まで3年継続事業 年間 8 回
史跡見学会	○ 4月(芝山方面)、6月(東金方面)、10月(埼玉県)、11月(飯岡方面)へ4回実施	年間 4 回
会報	○ 2/16 No.5 ~ 12/25 No.9まで2か月1/度のペースで5回の発行	年間 5 回
史跡めぐりハイキング	○ 6/11 上本佐倉、本佐倉方面へ 11/26 本佐倉、～佐倉方面へ	教育委員会共催 年 2 回
運営委員会	○ 1、3、6、9、12月の各月に実施	年間定例会議 5 回
総会	○ 1月28日(土)第2回総会を実施	1月27日(土)第3回総会
家紋調査	○ 酒々井町居住100年以上の488戸について調査した 本年度会報に発表します。	未定



鬼と遭つたら返れ

酒々井 木内忠治郎



これは漢文を讀まれるときの一つのヒントです。漢文は、今では実用性の乏しいものとしてとかく人々から敬遠されがちな学問のようです。しかし私どもは少くも郷土研究ということに興味を持つ者には、先ず郷土として誇るべき本佐倉城址などについては、歴史その他の立場から見過ごしてはならないと思つて、これを研究するには、その原典とも見られる『千葉大系図』などは一応目を通しておく必要があると思つて、しからしこれに載っている記事はすべて漢文であり、しかも全文が白文であるから返り文とか送り假名のような読み符号などは、すべて下として、内容を念得しようとしても仲々面倒です。

そこで漢文を讀むための一つのヒントとして用いられている「ヨニニト」遣びましたので、ペンと執ることになりました。もちろん漢文というものが、さうの簡単な一つのヒント位で片付けられるものではない、むしろとつと奥深いものがあるという、ことばなただも十分承知のとおりであります。このヒントだけ頼りて讀み進んでいく過程で、若し解しかねるところがまた場合、そこは研究課題として避けて通り、ともかくもラ・ニ・トの三字だけの活用で突き進んでいって、千葉大系図に載っている破度のものであれば、大体のところは読破していきけるのではないかと思ひかけて

あつて、まして傍り英などがついていたものを讀んでいけると、このヒントを頭にに入れて讀み進んでいけると、或る程こんど時に「ヨニニ」が或は「ト」などの助詞がつけられ、そして上に返つて讀むこととなるのか、などという理解もつき、それがものゝまがという上で最も大切な自信ということもつきながら、ひいては漢文というものを身近かに親しみ易くなり、從つて次々にまてくる難問にも取り組む意欲もまてくるのだと思つわけです。

それでは、千葉大系図(本文ハベリ)の将門の項と例にして讀み進んでみましよう。

- (一) 将門  
領居于下総国相馬郡討於国香振兵威天慶二年己亥建皇都新平親王同三年庚子二月十四日放下総国幸嶋中貞盛之天須命藤秀郷獲其首餘党悉七滅

右の白文に對し「ヨニニト」の助詞を返り英と各要所につけて見ますと次の(二)のようになります。



- (二) 将門  
領居于下総国相馬郡討於国香振兵威天慶二  
年己亥建皇都新平親王同三年庚子二月十四  
日放下総国幸嶋中貞盛之天須命藤秀郷獲其  
首餘党悉之滅

これをさうに讀み下し文にすると

(三) 将門下総国相馬郡に領居し國香を討て兵威を振るり天慶二年己亥皇都を建てて平親王と號す同三年庚子二月十四日下総国幸嶋に

於て貞盛の矢に中り命を殞す藤秀の首を獲り餘党悉く之滅したり。

さて、私がおこがましくもなせこのようなくとを書いてみたと思いついた動機は、ただ今の高校あたりで当然教えられるであろうと、私の家族をも含め、私の狭い一部の交遊範囲に對して、このヒントのことについて質問をしてみました。すると、殆んどの相手から「知らない」「教わらない」「忘れた」という答えが返つてくるので、そんなことならと感づいてのことです。されば、といて、この一文を「覽下」する方も同様であられるであろうから、などと、決してそんな不遜な気持ちで前提として、めななく、私自身漢文というものは未知の分野であり、これからは大いに勉強していかなければならないと考へている段階であり、そんな気が持て、私自身にも納得させたいという、その心情を、結果的にはこの様な短文となつてしまつて誠に恥かしい次第であり、高賢と感謝して、ペンと握ります。

木内忠治郎氏のこと  
本年八十五才  
本郷土研にあって相京 沖田雨次と共ニ三本柱の一人、特にその旺盛な知識、研究意欲はとどまるところを知らず、一言勿れ今日学ばずして明日ありと、と意氣ます。高し。  
又句を作り、書き能くし、麥酒を何より愛し、酔うほどに「頃、頃、頃」の牙文の聲量に豊かに驚くはかり。  
郷土研の良職の府として氏の存在は、崇高なものである。



郷土研日記



七草かゆと食べる会

28名の参加者で会場の研修所は超満員... 今年も会費は... 参加者で会場の研修所は超満員... 今年も会費は... 参加者で会場の研修所は超満員...

会計報告

Table with 2 columns: (収入) and (支出). Rows include items like '参加者会費 (28 x 500)', '郷土研事業費より', '魚蔵 (オドワル、利身)', 'Aコープ (みかん)', '大谷 (ビール、もち他)', '紫宮 (ガス)'. Total income is 27,340 and total expense is 27,340.

運営委員会

総会準備のための運営委員会、行事面、会計面より真剣に検討... 総会準備のための運営委員会、行事面、会計面より真剣に検討...

第三回 郷土研定時総会

60名近くの会員の参加をいただき研修所開設以来... 60名近くの会員の参加をいただき研修所開設以来... 60名近くの会員の参加をいただき研修所開設以来...

日蓮宗不受不施派のこと

加川治良

昨年出した詩集が、ある詩集... 昨年出した詩集が、ある詩集... 昨年出した詩集が、ある詩集...

ため、日蓮宗僧侶、とも... ため、日蓮宗僧侶、とも... ため、日蓮宗僧侶、とも...

おり重なる弾圧でその宗派の僧... おり重なる弾圧でその宗派の僧... おり重なる弾圧でその宗派の僧...

与と書かれていますが、同家は日蓮宗... 与と書かれていますが、同家は日蓮宗... 与と書かれていますが、同家は日蓮宗...

妙要 子ノ正月 酒々井町久兵衛母

現在酒々井町の某家へ了承を得... 現在酒々井町の某家へ了承を得... 現在酒々井町の某家へ了承を得...



# 郷土研究会 会員名簿・役員表 (S54.1.27改選)

会一會長 副一副會長 監一監事 委一運営委員  
 会計 (教育委員会) 細川 郡 起人  
 一 転居等による退会

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
菅原正	子安善兵衛	竹田喜一郎	石渡一郎	藤崎善学	鈴木忠一	谷川茂二	川島計介	青木不二夫	藤崎達男	石井七郎	和田綱雄	佐藤康子	岩田堅	中村寛	筋武夫	木内達彦	木田直子	大川熊雄	石渡朝治郎	小倉礼子	若林陽弘	鷗岡絹子	押尾克己	京増さく	青柳幸男	酒井照法	鷗岡嘉佑	木内忠治郎
58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
柏木光子	金杉智恵	木内常忠	木内常忠	北原光枝	飯塚みち	中野真和	萩原明子(寛)	高橋洋	塚本泰章	真子千鶴子	中川隆義	小別当光	左近嘉一	藤川正美	藤原和一	京増徳雄	小関弘	綿貫四九三	京増和治	京増忠太郎	藤崎一英	玉井旭	朝増伊之助	成久清治	宗鳥大	青藤一朗	子安とよ	斎藤俊雄
87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59
杉浦重剛	古川正	相京晴次	高橋政光	清宮芳衛	森田昭馬	細川政美(重彦)	福田せつ	松本知子	佐瀬恵雄	木村ヒシ子	相京三郎	山倉清孝	吉田干代	小坂泰久	福田忠夫	野谷敏子	古川今子	綿貫実	富沢勝	福田豊吉	松本敏子	谷田秀雄	加瀬はる	岡田まゆ	青木幸子	宇匠見春吉	鈴木金子	白石正雄
116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88
遠藤博之	木村干里	押尾忠	石井初江	杉岡浩子	清水京子	増田永子	青柳栄子	若林隆子	島田清	大谷三依	檀谷健蔵	北詰栄男	海保芳雄	寒郡義一	吉岡治保	福田富蔵	宮田きん	宮川義典	高橋朝子	高橋朝子	沖田善三郎	加川治良	高橋健一	河島重雄	田中健正	綿貫正	相京正明	相京幸一
145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117
兵倉美代子	山口栄子	金子文江	福田登代	増川宣子	御厨満一	久米孝子	大矢和子	佐藤絹江	青木のふ	大宮政男	鶴岡光江	鶴岡知子	木内幸助	青木朝次	勝田三郎	岩崎寛子	高橋保	本田幸雄	山田乃り子	田浦文子	三枝たか	竹内清	福田正一	鶴岡とし子	大野ゆき	並木もと	中山和子	大塚節子
174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146
			相京さく	福田さく	大沢みづ江	相京よし枝	浜島てる	細谷みち	藤崎ゆきえ	北島永子	中台ヒリ	作田歳之	高井F代子	京増治郎一	諸岡好	坂入幸子	福田正彦	古川俊雄	小倉徳子	相京彬	福田とみ	石渡利平	増田基	山崎登志子	櫻井富子	増川房子	関清子	並川綾子

# 忘れていませんか？ 3/13 and 3/16

## 町外史跡見学会(市原)

内房地方に位置する市原市の開拓は古く、古墳時代には上海上国造(かみうなつかみくにのみやつこ)がおかれ、大化の改新(645)には、市原の地に上海上国府がひらかれた。そして天平13年(741)、上海上国分寺が建立されるなどして市原は、古代上海上国における政治文化の中心地となった。

国府の庁舎の位置は、現在市役所や市民会館が建てられてある市内惣社にあったと推定されている。

上海上の国司は、初代から182代まで兼任しており、その中には万葉集の選者、大伴家持がいる。又「更科日記」の作者は、上海上国司菅原孝標(すがわらたかすゑ)の娘であることも知られている。



### (国分寺)

聖武天皇の時代(724~49)、勅願によって全国の国ごとに建立された国分寺の、上海上国分寺が当時の開基とされている。のち数度の兵火にあって江戸中期の元禄年間に今の本堂(薬師堂)、仁王門などが再建されて今日におよんでいる。

本堂の南東には旧国分寺の塔跡など遺存し、境内を中心に200m四方が上海上国分寺跡として国の指定史跡になっている。

遺構からは二十四葉単弁蓮花文鏡瓦唐草文宇瓦などが出土し、境内の文化財館に陳列されている。



神代の話。山の神と野の神のあいだに生まれた木花開耶姫命(コハナサカメヒメ)は、父のいいつけて霞のうって富士の山頂に天降り種子をまきました。これから桜の花が日本中にひろがったとか。郷土研の54年度会費永納方会計係までよろしく。

### (鳳来寺観音堂)(重文)

もとは近くにあった喜福寺の仏堂であったが、M16年の善福寺が廢寺になり、現在鳳来寺の境外仏殿とされている。堂は桁行3間、梁間3間、一重、屋根寄棟造り、カヤ葺き、軒は一重扇柱二重、室町末期の建築とみられる。

### (西願寺阿弥陀堂)(重文)

桁行3間、梁間3間、一重、屋根寄棟造り、カヤ葺きの禪宗様建築。かつては上部に金箔を押し、下は朱塗りで一名「光堂」とも呼ばれていた。S2年解体修理の折、墨書銘が発見され、明応4年7月城主土平蔵が仏門に帰依し、鎌倉の名人大工二郎三郎に命じられた。明

### (大多喜城跡)県指定

城は甲斐武田氏の流れと伝え、初め大多喜根百屋城と称し、1.5kmほど離れた岡部台にあったという。

今に遺構を残す大多喜城を築いたのは本多忠勝で、天正年間のことである。

本丸跡には復元天守閣があり、これは旧家渡辺家から発見された「天守絵図」を参考に、四面と同じ形に設計し、再現されたものである。

二の丸跡には忠勝築城時に築いた周圍約10m深さ20m以上といわれる「大井戸」と「兼匠門」が遺存して県指定の史跡である。

## 憶本佐倉城

軍兵の出入りして協議重ね頃、永祿修羅の世のこと  
天正十八年今葉氏滅びしあと、処立高くして沼一望す  
この丘に軍馬嘶き合戦に赴きしこまいまのまぼろし

新しき草鞋にしかと履き替えて、雑兵どもの徒歩渡りけむ  
城あとは草荒れ山荒れ生活に、欠かせぬ井戸はいづに在りなむ  
城の下に持岸とするしくみにて舟の、来しあと今も残れり

人の名も定かならざる五輪の塔、累なり合うもあはれなりけり  
城下より程遠からず開行らにあいて、果てしは無念なきすや  
五百年前のこと故おぼらなり本佐倉城、争多くつまびらかならず

過ぎゆきしあとには何の残るらむ、残るべくして残らぬ多し  
(創作同人 押尾克己)

(後記) 新年早々に原稿を送って下さった加川さん。暮のうらから新年度会費と届けて下さった高橋さん。今度は絶対書きますよと言った下さった藤川さん。会報は家中ですみからすみまで読んでくると橋田さん。皆さんの声を何より嬉しく感じ今年も楽しい会報づくりになります。土号は三月発行予定です。(H)